

発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

編集・発行人 飯田宗一郎

東京都中央区日本橋本町3の3
三井銀行本町支店ビル3階
電話 東京 (270) 4431
振替 口座 東京 74590番

製作

株式会社 中央公論事業出版

創刊号

昭和40年1月25日

内容

法人ニュース	2
募金ニュース	3
セミナー	5
講演会	7
学生の声	8

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS



大学セミナー・ハウス に期待するもの

蠟山政道

大学セミナー・ハウスも近く開設される運びとなったと聞く。まだ行ってみる機会をもたないが、遠く都市を離れた奥多摩の丘陵地に建てられているハウスの姿を想い浮かべるだけでも晴ればれしい気持ちになる。

大学セミナー・ハウスに期待するものは多々あるが、なかならず私のいちばんに期待することは、国公私立の諸大学の教授や学生が、大学および大学生という共通の立場において相互の接触を保つことである。いまでも、教授達はそれぞれの学会を通じ、また学生達もスポーツとかサークル活動とか、また県人会等で、自己の所属する大学を離れた立場で相互の接触を保つことができたであろう。しかし、大学という高等教育の機関に所属するという一点だけで共通の立場での接触はなかった。大学セミナー・ハウスは、そういういままではなかった機会と便益を提供するのである。これはまことに意義あることである。

なぜかという、今日は大学および大学生という問題が、その大学の種類やその専門学科をこえて、一つの重要な問題となつてい

るからである。その問題の背景には次代を背負う新しい世代という重大な国家的問題があるためである。今日の大学および大学生は、昔のように少数の国民に属するものではなくなつた。大学教育を受ける国民層は次第に増大し、その社会的意義は大きく変化しつつある。大学に学ぶ大学生は、もはやその学歴とか学力とかをうる目的のみで大学生生活を送つてはならない時代となつたのである。

大学および大学生の激増を見るに至つたということは、日本の産業化と技術化を中心とする近代化の発展を原因とするのである。それによつて社会構造は複雑に分化し、その機能も激しく変動している。かつては家庭の経済的事情によつて大学進学をはばまれていた者も、今日ではいろいろの手段や制度によつて、進学の機会に恵まれている。こういふ社会的変化が原因となつて大学および大学生の増大となつたのである。現在の状況は、一パーセント程度だが、将来の日本は、米国のように当該年齢層の四〇パーセント近くが大学生となることは考えられない

が、二五パーセント近くになる時は来るであろう。
このことは、何よりも大学と大学生とがこの時代の変化に即応し、その変化に伴われて新しい状況に対処しうる人間をつくり、またそういう人間にならねばならぬ、ということの意味する。強い言葉でいえば、大学も大学生もみずからそういう責任を自覚する必要がある。それは、単に社会に出る、すなわち就職に必要な条件を満たす、というだけのことではないように思われる。

二

社会的変動に即応し、新時代に対処してゆくということは、今日の大学が主たる目的としている知的教育、または技術教育だけでは足りない。そこには、特定の大学または大学生という限られた狭い世界だけでは与えられあるいは受けられないものがある。それは社会を知り、人を知るということによつて得られるものなのである。だが、一定の限られた大学または大学生の生活を離れた、街の生活や社会的な集団やアルバイトなどを通じてうる社会的人間の知識には、現在多くの大学生、とくに大都市の大学生の場合に見られるように、多くの非教育的なものがある。そこには狭い形式的な教育的世界と広い流動的な現実的世界とをつなぐモラルや秩序というものがかけているからである。せっかく、人生における最高の教育機

関に属しながら、多くの大学生が大学よりも社会から多くの影響をうける、というような状況は感心しない。ざりとて、大学という形式的な狭い世界では、社会的な人間教育は十分に得られない。
この矛盾を打開するために、新しい大学はその教科目の上に一般教育を重要視し、また多くの科外活動を奨励したり、またイデオロギー運動に利用される可能性のある政治活動すら大目に見てきたのである。しかし、なんといつても、特定の大学の制度や機構を通じての教育活動には形式的なものがあり、流動性が足りない。人間としての成長に必要な経験や機会に乏しい。

この欠陥を補うものの一つとして、私はこの新しい大学セミナー・ハウスの施設活動を期待したのである。その運営方針や利用方法によつて、その効果は違ってくるであろうが、少なくともここで異なる大学の所属する人々が同一の立場において生活を共にして、互いに人格的に接触する機会をもつことは非常に得難い機会であり、貴重なチャンスを提供することになる。また、時には社会人を招いてその体験や意見を聴く機会があればいっそう得難い取組となる。先年米国のダートマス大学に行つたとき、そこは夏はゴルフ・コース、冬はスキー場にもなる美しい田園の景色にとりまかれ(二頁五段目)



大浜早稲田大学総長

理事長に就任

石館守三氏の辞任による後任として

昭和三十六年十一月三十日、丸ノ内日本工業クラブにおいて開催された財団法人大学セミナー・ハウス設立発起人会は、東京大学名誉教授石館守三氏を設立代表者に推挙し、設立申請をなした。したがって同氏は、昭和三十七年三月三十一日、財団法人設立許可と同時に理事長に就任された。爾来昭和三十九年九月三十日辞任されるまで、本法人創立の目的であるセミナー・ハウス建設のため、懸命の努力をされた。募金運動に奔走されるときに、敷地の買収、設計、会員校との協力等、創設時代の困難を克服してセミナー・ハウスの輪廓をつくられた功績は大きい。

セミナー・ハウスが開館になるまでは、中途で理事長を更迭しない方がよいという法人の方針から、同氏は任期二年の第一期を終わってからも重任されたのであったが、急に身辺多忙を加え、創設の大任を果たし得ないとの考えから、やむなく辞任を申し出られた。理事会は創設の大業を果たすためにも、セミナー・ハウスが国公立立大学共通の地盤の上に立っているという性格からも、そしてセミナー・ハウスの創設に最も深い



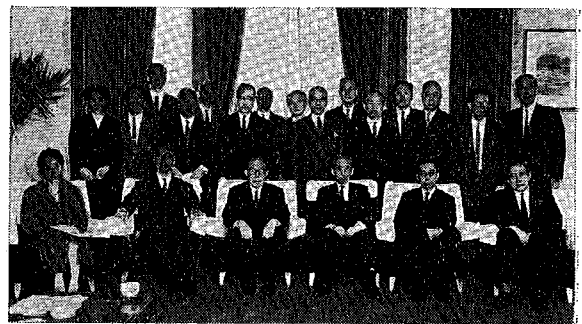
開館準備体制に入る 館長に茅誠司氏

事務理事に飯田宗一郎氏

- 評議員会出席者(十一月七日 銀行クラブ)
- 来賓 三井銀行会長 佐藤喜一郎氏
 - 議長 大河内一男氏
 - 有山 登氏 金丸 重嶺氏
 - 布施 欽吾氏 中村 哲氏
 - 井上 吉之氏 大浜 信泉氏
 - 石館 守三氏 岡田 正弘氏
 - 上代 たの氏 田上 穂治氏
 - 河西太一郎氏 木村健二郎氏
 - 茅 誠司氏 手塚 富雄氏
 - 小出 廉二氏 山田良之助氏
 - 松平 正寿氏 久米 又三氏
 - 三輪 知雄氏 大原 恭子氏
 - 森脇大五郎氏 飯田宗一郎氏

昭和三十九年四月、建築工事に着手したが、本館の設計がくさび型の逆ピラミッド型というきわめて独特な形をなしているため、工事中で建築許可に非常に手間どり、工期が若干おくれる懸念もあるが、昭和四十年五月の開館を予定し、本法人はいよいよその準備体制にはいることとなり、昭和三十九年十一月七日、丸ノ内銀行クラブにおいて評議員会を開催した。

本法人の代表者は理事長であるが、セミナー・ハウスという教育事業の最高責任者として館長制をしくこととし、理事会の推挙する



は大学人のすべてが認めるところである。

大学セミナー・ハウスは日本の大学教育のなかに誕生する小さな機関であるが、内に秘められた大使命にふさわしく、大館長が与えられるという幸運を得て、開館準備の第一歩を踏み出したわけである。

一方常勤理事には専務理事制をとることとし、セミナー・ハウスの構想樹立の中心となり、本法人の創立に今日まで専念してきた常務理事飯田宗一郎氏を専務理事に任命した。

なお、館長および専務理事制をしくため、寄付行為一部変更の文部大臣への申請原案およびその就任を昭和三十九年十月一日とする

(一頁より)

たところであるが、多くの知名の士が米国の各地から泊りがけで来て、講義やセミナーをする制度があった。

日本の大学ではそんな真似はできないであろうが、このセミナー・ハウスならば、そういうことも可能であろう。ことに東京に近いところでもあるから、一泊または二泊の予定で多摩丘陵のエキスカーションをかねてここにやってくる知名の人々も期待できるであろう。そんな市にある大学に期待できないことも、実は大学生活をしながら社会生活の一端に触れる機会となるわけである。

人間が一生をかけてやる仕事のヒントなど、必ずしも教室や実験室だけで、あるいは読書や議論だけから得られるわけではない。わずか一泊二泊の旅行から、あるいは数時間の散策の間から得られることもある。環境をかえることにより、また空気の違った場所に移ることによって新しい着想や想念が生まれることもある。大学セミナー・ハウスが、そういう条件を提供することになれば、それこそ今日の日本の大学と大学生が求めているものが与えられることになる。私は、このことを大学セミナー・ハウスに冀望しかつ期待するものである。(願聞)

ことを評議員会は全員一致で議決した。

◆法人寄付

法人を対象とする募金運動は、大学セミナー・ハウス建設後援会を主軸として展開されているが、なお目標達成に至っていない。寄付金免取返期間が昭和四十年七月三十一日までであるから是非とも三億円募金を達成したいものである。

現在までのところ法人の寄付申込状況は下記の通りである。この

募金運動の現況

◆個人寄付

昭和三十九年十月三日の理事会は、法人寄付と並行して個人寄付もお願いすることを決意し、直ちに実行に移したところ、意外に多くの方々から同情と支援が与えられ感謝している。

個人対象の募金運動は単なる集金運動でなく、我々がわが国の大学教育の現状を憂えてセミナー・

ハウスを建設するに至った事情を知っていただくとともに、心ある知識層、指導層の方々にもこの事業に参加していただきたいからである。一、二の特定の巨額の寄付金で建設されるのではなく、国民的基盤の上に新しい人間形成の大学教育を展開することに意義を感じたからである。

の風潮が日本の中に育ちつつあることはうれしいことである。貴重な財産を託された本法人は、その設立の目的を果たすために新たな誓いをなさねばならない。このセミナー・ハウスが生み出す教育的成果は寄付金の数倍、数十倍となって明日の日本の発展に寄与するに違いない。残る一億円の募金の達成には更に大なる協力を仰がなければならない。

我々の願望は早くも誤りでなかったことを知って感激に堪えない。呼びかけに応じて寄付の申込みがつかつてきている。まだ予定の四分の一くらいしか依頼状を送送していないが、反響は好調であり、一万通を終わる頃までには多くの金額が寄せられることと期待している。有力な各種団体や紳士録からお名前を拝借したことをお許し願いたい。

A 法人寄付		B 個人寄付	
申込総額	申込会社数	申込総額	申込人数
一、〇〇〇万円以上	一社	一〇〇万円以上	二〇〇万円未満
五〇〇万円以上一、〇〇〇万円未満	五社	一〇〇〇〇	一〇〇〇
三〇〇〇〇	八社	一〇〇〇〇	一〇〇〇
二〇〇〇〇	一五社	一〇〇〇〇	一〇〇〇
		(合計)	一九二、三三二、〇〇〇円

個人寄付申込者芳名 (第一回報告、昭和三十九年十月一十四年一月、申込順)	所属
石館守 三殿	東京大学名誉教授
矢内原恵子殿	故矢内原忠雄氏夫人
斎藤 勇殿	元東京女子大学長
佐原六 郎殿	慶応義塾大学教授
石川吉右衛門殿	東京大学教授
石井栄 治殿	南多摩郡由木村長
武井大 助殿	昭和産業相談役
笹山忠 夫殿	アラスカパルプ社長
田沢哲三郎殿	上田短資代表取締役
森村謙 三殿	日本陶器顧問
住本昇三郎殿	団体顧問
松本 晁 吉殿	近海郵船相談役
黒川武 雄殿	虎屋会長
井上 貴 雄殿	巴川製紙常務
渡辺 逸 郎殿	日本板硝子社長
福田 董 殿	福商会長
金子堅次郎殿	日本トレーディング会長
浅田長 平殿	神戸製鋼会長
小野 清 造殿	大同鋼板社長
武蔵工業大学殿	
友貞 甚 輔殿	関西汽船社長
阿部 康 二殿	日本証券業協会連合会専務
松本幹一郎殿	明治鋳業相談役
阿部 洋 大殿	日立製作所名古屋営業部長
相浦 浩殿	帝人製機社長
竹田喜 夫殿	三青社社長
石黒英 一殿	元東邦ガス社長
宮崎 博殿	日本事務器常務
芝川 栄 三殿	芝川商店監査
浅原源 七殿	日産自動車相談役
稲井善 夫殿	宮城化学工業社長
遠山久 影殿	遠山商店会長
浦島亀太郎殿	明治製菓会長
東竜太 郎殿	東京都知事
村上正 夫殿	旭硝子常務
磯 英 治殿	安立電気社長
稲葉 秀 三殿	経済評論家
西村善四郎殿	三井銀行人事部長
田中 貢 殿	田中電気研究所
岸 鶴 市殿	北海道拓殖銀行東京業務部長
松田正 雄殿	アラスカパルプ専務
伊藤吉次郎殿	大日本セロロイド相談役
伊豆富 人殿	熊本日々新聞代表取締役
田島光 三殿	三井倉庫顧問
大木 壯 助殿	三井銀行総務部長
榎本久馬太殿	医師
瀬戸弥三次殿	明治大学教授
遠藤三 郎殿	農業

募金ニュース

源了 門殿	日本女子大学助教授
小田成 就殿	近畿自転車競技会会長
大浜 信 泉殿	早稲田大学総長
宇野 勝 次殿	公認会計士
増田 四 郎殿	一橋大学長
大軒 順 三殿	日本経済新聞役員
井上 等 殿	明電舎常務
高村 象 平殿	慶応義塾長
小川 浩 平殿	トンボ鉛筆社長
小野 義 人殿	東海銀行監査役
大槻 円 次殿	大槻商事社長
大内 田 正殿	日立製作所
高須 満次郎殿	協同木材貿易社長
大良 美 孝殿	会社員
岡田 謙 殿	東京教育大学教授
井上 吉 之殿	東京農工大学長
永井 道 雄殿	東京工業大学教授
大島 一 芳殿	中日新聞役員
手塚 富 雄殿	東京大学名誉教授
植田 純 一殿	鉄道貨物協会事務局長
大河内 一男殿	東京大学総長
高階 研 一殿	樞原神宮司
三輪 知 雄殿	東京教育大学長
末松 和 彦殿	北海道拓殖銀行東京支店長
高田 寿 夫殿	高田工業所
高木 純 一殿	早稲田大学教授
茶谷 義 教殿	岸本倉庫社長
荒井 誠 一殿	弁護士
多摩美術大学殿	
大沢 寿 一殿	日本電気常務
普通士学園高等学校宗教部殿	
茅 誠 司殿	東京大学名誉教授
上代 たの殿	日本女子大学長
大原 恭 子殿	日本女子大学教授
内ヶ崎 賢五郎殿	東日本興業相談役
朝永 振一郎殿	東京教育大学教授
飯田 能 子殿	学生(東京)

飯田 恵 殿	学生(東京)
佐藤 喜一郎殿	三井銀行会長
柳 満 珠 雄殿	三井銀行社長
芝田 徹 男殿	三井銀行常務
大倉 三 郎殿	京都工芸繊維大学長
石川 忠 治殿	高萩パルプ会長
高坂 正 顕殿	東京学芸大学長
升本 喜兵衛殿	中央大学総長
高田 太 郎殿	網走商工会議所会頭
田中 久 孝殿	明治通信社常務
山内 俊 吉殿	東京工業大学名誉教授
寺門 徳太郎殿	川崎アスベスト社長
大竹 晃 殿	学生(名古屋)
高橋 泰 藏殿	一橋大学教授
田上 穰 治殿	一橋大学教授
武田 孟 殿	明治大学総長
小出 廉 二殿	明治大学学長
渋谷 澄 殿	北日本機械取締役
飯田 宗一郎殿	大学セミナー・ハウス専務理事
中川 章 殿	大学セミナー・ハウス職員
堀内 睦 子殿	大学セミナー・ハウス職員
金子 清 子殿	大学セミナー・ハウス職員
堀米 建 一殿	工場経営能率指導
金子 栄 一殿	林産業(栃木県)
田中 久兵衛殿	三井銀行副社長
小山 五 郎殿	三井銀行常務
飯野 匡 殿	三井銀行取締役外国部長
安藤 利 亮殿	三井銀行秘書課
村上 民 雄殿	三菱信託銀行

(寄付申込額内訳)

(人数)

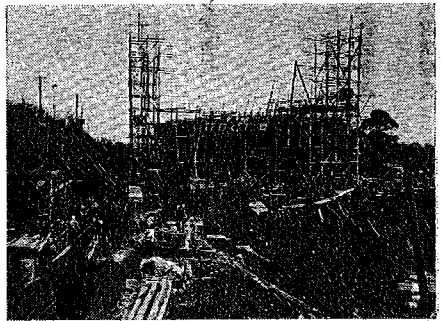
- 一〇〇,〇〇〇円
- 三〇,〇〇〇円
- 一〇,〇〇〇円
- 五,〇〇〇円
- 三,〇〇〇円
- 二,〇〇〇円
- 一,〇〇〇円

個人募金依頼状

財団法人大学セミナー・ハウスの構想は各方面の支持をうけ、評議員会議長 大河内一男 館長 茅 誠司 代表常任委員 佐藤喜一郎 謹啓 大学セミナー・ハウスの構想は各方面の支持をうけ、計画も進捗し、財界の募金と国库補助金によって建設資金の三分の二に達しましたので、昭和四十年四月の開館を期し、昭和三十九年三月建築工事に着手いたしました。国公立大学共同の教育施設としては、わが国最初の試みであるばかりでなく、世界にもその類を見ないきわめてユニークなセミナー村が多摩丘陵の美しい自然の中に出現いたします。このことは単に金銭上のご賛助をお願いするばかりでなく、一人でも多くの方にこの企画の重要性をご理解願ひ、進んで大学教育の責任をお分ちいただきたいと念願するからであります。何卒ご厚情をお寄せ下さいますようお願い申し上げます。

個人のご寄付について
寄付金は一口の単位を一、〇〇〇円としますが、口数、金額の制限はありません。なるべく三口以上願ひます。

敬具



建築現場



現地視察(大浜理事長、森戸辰夫氏他)

セミナー・ハウスの精神的基盤づくり



★セミナー・ハウスの構想をわが国の大学の中に浸透させるために
 ★セミナー・ハウスと各大学との協力体制を樹立するために
 ★セミナー・ハウスがわが国の大学教育に奉仕しうる範囲を検討するために

★国公立大学共同の性格を特色づけるために
 ★わが国の大学教育の実態を把握するために

●大学教育セミナー

— 教授(教育)を対象として —

第一回

期日 昭和三十八年六月二十九、三十日

場所 箱根湯本 福住旅館

議長

- 東京大学教授 手塚 富雄氏
- 東京大学教授 松田 智雄氏
- 東京教育大学教授 岡田 謙氏
- 早稲田大学教授 高木 純一氏
- 慶応義塾大学教授 佐原 六郎氏
- 立教大学教授 野口 定男氏
- 日本女子大学助教授 東 洋子氏
- 東京大学助教授 西村 秀夫氏
- 東京工業大学 谷口 修 藤田重文 永井道雄
- 谷口 修 藤田重文 永井道雄
- 東京医科大学 荒谷真平 篠原武夫
- 東京農工大学 小野四郎 高嶺 浩
- 電気通信大学 渡部重勝 小林竜夫
- 一橋大学 田上穰治 小泉 明

出席者(敬称略)

- 東京大学 手塚富雄 小谷正雄 松田智雄
- 森 清 森永徳弘

東京学芸大学

- 森 清 森永徳弘

第二回

期日 昭和三十八年十月十二、十三日

場所 クリスチャン・アカデミー

出席者(敬称略)

- 早稲田大学 源了円 大原恭子

大磯ハウス

- 議長 東京教育大学教授 岡田 謙氏
- 東京教育大学教授 松田 智雄氏
- 東京大学教授 手塚 富雄氏
- 早稲田大学教授 伊原 貞敏氏
- 東京工大助教授 石本 新氏
- 立教大学教授 石島 涉氏
- 東京女子大学教授 玉虫 文一氏
- 特別講師 チュービンゲン大学(ドイツ)学生局長 フェドール・ズイバート氏

第三回

期日 昭和三十九年九月二十六日

場所 国立教育会館(虎の門)

- 議長 東京大学名誉教授 手塚 富雄氏
- 東京大学教授 松田 智雄氏
- 東京工業大学教授 永井 道雄氏
- 早稲田大学教授 高木 純一氏
- 出席者(人文、社会、自然、一般 および特殊各部門)
- 立教大学教授 細入藤太郎氏
- 東京工業大学教授 崎川 範行氏
- 一橋大学教授 細谷 千博氏
- 東京女子大学教授 白井 常氏
- 東京大学教授 堀米 庸三氏
- 出席者(敬称略)
- 東京学芸大学 松原元一 前川春雄
- 東京農工大学 田原虎次 大沢正保 武笠康雄
- 東京医科大学 荒谷真平 篠原武夫
- 東京工業大学 永井道雄 崎川範行
- 電気通信大学 渡部重勝 小林竜夫
- 東京大学 堀米庸三 松田智雄 西村秀夫
- 一橋大学 古賀英三郎 喜多了祐 細谷千博 田上穰治
- 東京教育大学 岡田 謙
- お茶の水女子大学 藤田健治

- 伊原貞敏 西村正衛 川原栄峰
- 山岡喜久男 坂本信太郎
- 明治学院大学 大山正春 秋元 徹 和田昌衛



セミナー（於国立教育会館）

東京都立大学
喜多川篤典 北島正元 金田一雄

● 大学教育セミナーの発題講演から

——セミナー・ハウスはどう活用されるべきか——

立教大学教授 細入藤太郎氏

セミナーとは、古い使い方としては植物の種子をまいて一定の大きさになるまでの苗床の意味であったし、また動物を繁殖させる場所の意味でもあった。苗床とは学問研究をする立場にあてはめてみれば後継者を養うところと考えてよい。親しい人間関係をづくりながら学問を研究発展させることとみてよい。

セミナーを成功させるためには組織、タイミング、テーマの三つに注意する必要がある。

- 日本大学 細谷英夫 市川清志
- 立教大学 手塚富雄 細入藤太郎
- 青山学院大学 郡司喜一
- 成蹊大学 関島久雄
- 明治大学 高岡美郎 藤井耕一
- 東京女子大学 白井 常 鳥山英雄
- 武蔵工業大学 酒井太治 佐竹誠也
- 明治学院大学 大西亨邦 玉井東助
- 日本女子大学 大原恭子 一番ヶ瀬康子
- 早稲田大学 谷 資信 正田健一郎 高木純
- 慶応義塾大学 原島 進 山岸 健

一、組織としては、第一は学者、研究者、第二は大学院学生、第三は学部学生の三種が考えられる。
二、タイミングとしては、著名な学者が海外から来日したような場合にセミナーを開くことである。
三、テーマとしては、一年を四期に分け、一期に一つくらいの特定のテーマを定めさまざまな角度からアプローチするとよい。総合コース的な態度で検討したらよい。

東京工業大学教授 崎川範行氏
大学における自然科学部門は非

常に細分化している。そこで細分化されたものでない広いテーマのセミナーを必要とする。
科学の進歩はすばらしく速い。だから専門の論文を読んでいくだけでも大変な仕事である。ましてや学生にはその機会すらない。そこで各大学が交流したり、新しい問題についてディスカッションしたりする場をつくる必要がある。セミナー・ハウスが利用できたならば非常に具合がよい。

自然科学の分野だけでもこんな状態なので、人文科学の領域の者が自然科学の発達を正しく把握していないと大変なことになるし、またその逆のこともいえる。要するに自然科学は自然科学で、人文・社会、自然科学の組み合わせ

わさってできているこの世の中で、一方だけを追求する結果、ともすると起こりそうな交通事故を起こさないためには、意志の疏通が大切である。

一橋大学教授 細谷 千博氏
一橋大学などは伝統的にセミナーを重視している。今後ますますセミナー・ハウスを利用させてもらいたい。またセミナーの場を与えることができよう。セミナーは師弟間、学生間、先輩後輩間

の結びつきをよくする。
大学相互の交流に役立つ。これがないのが日本の大学の欠陥である。ドイツでは制度的に大学が移れる。アメリカはマスター、ドクターが別の大学という場合が多い。スタッフも移動する。これは学問的刺激となり発達をうながし、共同研究体制が生まれる。学生の共同研究会、国際問題研究所のセミナーなど、セミナー・ハウスに集まれば非常に効果的である。

専門分野間の交流の場としてセミナー・ハウスをさせる。国際政治の場合は特にそうした必要がある。社会学者や心理学者などの参加によって新しい面が出てくる。国際的な学術研究や教育活動の場としてセミナー・ハウスは適当

● 一般教育講演会

【主題】 大学教育における人間形成の問題

- (一) 一般教育の任務と推進
- (二) ドイツの大学はどうしているか

講師 チュービンゲン大学学生局長
フエドール・ズイベート氏

戦後の教育改革によって生まれた新制大学は、人間形成をその重要な任務の一つとしている。そして専門教育とならんで、一般教育を中心とする教養課程を設けることによってこの新しい任務と取り組んだはずである。現状ははたして

である。大きな学会には向かないが、小さな専門分野の学会にはよい。日本外交史、近代史を研究するためにアメリカから若い人達が来ているが、日本の学者との交流も考えられる。フレンドの国際学生セミナーの場所としてもよいし、在日留学生と日本の学生との交流の場所にもよい。韓国の学生と日本の学生との話合いなどは、日韓正常化に役立つであろう。
セミナー・ハウス自体の企画する国内的、国際的セミナーを開催することを是非実現してほしい。この場合講師の謝礼くらいは大学セミナー・ハウスが負担してほしい。こうしたセミナーこそ、セミナー・ハウスの存在価値を高くするに違いないし、また最も要求されることである。

期待された成果を収めているであろうか。
本法人はドイツのチュービンゲン大学において学生の人間形成に関する教育面の推進者であるズイベート学生局長を招聘して、東京においては一般教育に関する講演会、京都においては協議会、そして東京では一泊二日のセミナーを行なった。

セミナー・ハウスの設立目的とよく合致した教育活動をドイツに

講演会

おいて行なっているズイベート氏からは、豊富な体験をきくことができた。今後このような企画はセミナー・ハウスの一つの活動分野としたい。

後援 国立大学協会
日本私立大学連盟
日本私立大学協会

講演会

——学生を対象として——

【A 新入生を迎える講演会】

浪人生活、あるいは受験勉強的な高校生活から解放されて、入学の喜びを味わっている新入生として、学問の研究と人間形成という大学生活へ導くために計画したものである。

国公立にわたる学生が、第一回は早稲田大学大隈講堂、第二回は東京大学安田講堂をうずめた。大学生活への門出を祝福し、大学教育が彼らの人生に深いかかわりのあることを知らす機会とした。

第一回

期日 昭和三十八年五月二十四日
場所 早稲田大学大隈講堂
挨拶 早稲田大学総長 大浜信泉氏
一橋大学長 高橋泰蔵氏

講演

大学の使命

日本育英会長 森戸辰男氏

学問をする姿勢

第一回(関東の大学のために)
期日 昭和三十八年九月二十三日
場所 私学会館講堂

第二回(関西の大学のために)
期日 昭和三十八年十月一日
場所 同志社大学アーモスト館

賛助出演 東京大学名誉教授 坪井忠二氏
早稲田大学グリー・クラブ
明治大学マンドリン・クラブ

第二回

期日 昭和三十九年五月九日
場所 東京大学安田講堂
挨拶 東京大学総長 大河内一男氏

大学生活のもつ意味

東京大学教授 大塚久雄氏

学問をする姿勢

日本学術会議会長 朝永振一郎氏
東京教育大学教授

賛助出演

東京大学コール・アカデミー
東京大学 管 弦楽 団

【B 先人に学ぶ講演会】

わが国における学問上の先覚者の生涯と業績を、その高弟もしくは継承者から直接学ぼうとする目的で計画されたものである。先人が示した高い水準に到達するまで

の努力の中に、現代の学生は学問をする姿勢を学びとることができるとに違いない。

また大学において教師と学生との出会いが、学生の人生をどんなに創造的なものにし、豊かにするかの実例を知るまたない機会を提供するであろう。毎回非常な好評で、大学の中にあるきわめて質の高い学生を集めているようである。アンケートによれば、月一回とか年数回の開催を希望する学生も多いのである。学生を見なおすばかりでなく、このような学生を相手として教育活動を行なうセミナー・ハウスの存在理由を高く評価したい。眼の前にこのような良質の学生を見ることがよって、セミナー・ハウスは大いなる激励をうけることができた。

第一回
期日 昭和三十八年十二月七日
場所 慶応義塾大学三田講堂
挨拶 慶応義塾長 高村象平氏

講演

西田幾多郎先生の生涯と思想

東京学芸大学長 高坂正顕氏

小野塚喜平次先生の人と業績

国際基督教大学教授 蟻山政道氏

賛助出演

慶応義塾マンドリン・クラブ

第二回

期日 昭和三十九年十二月三日
場所 日本女子大学成瀬記念講堂
挨拶 日本女子大学長 上代たの氏

東京教育大学長 三輪知雄氏
坪内道遙先生の人と芸術
早稲田大学名誉教授 本間久雄氏
本多光太郎先生の人と業績

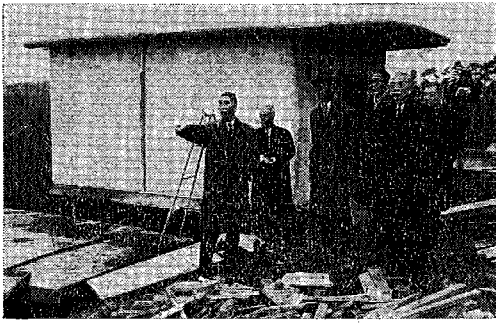
東京大学名誉教授 茅 誠司氏
賛助出演 日本女子大学合唱団

講演会に出席した学生の大学名

(四回の集計)

東京大学・東京教育大学・東京農工大学・電気通信大学・東京工業大学・東京学芸大学・一橋大学・東京医科大学・東京外国語大学・お茶の水女子大学・横浜国立大学・千葉大学・埼玉大学・東京都立大学・横浜市立大学・早稲田大学・慶応義塾大学・日本女子大学・明治大学・中央大学・日本大学・立教大学・法政大学・青山学

ニート宿舎の前で(台棟・一棟二入)



講演会(於日本女子大学成瀬記念講堂)

院大学・成蹊大学・東京女子大学・明治学院大学・武蔵工業大学・津田塾大学・順天堂大学・上智大学・国学院大学・東洋大学・専修大学・立正大学・日本医科大学・玉川大学・武蔵大学・東京経済大学・東京女子医科大学・東京家政大学・昭和薬科大学・駒沢大学・東京農業大学・共立薬科大学・相模女子大学・東京理科大学・芝浦工業大学・共立女子大学・女子美術大学・和洋女子大学・昭和女子大学・実践女子大学・国際基督教大学・亜細亜大学・成城大学・日本社会事業大学・東京慈恵会医科大学・工学院大学・星薬科大学・東京電機大学・桐朋学園大学・麗沢大学・国士館大学・千葉商科大学・神奈川大学・千葉工業大学

学生の声

学生諸君から直接いただいた手紙や講演会のアンケートの中からえらんだものである。セミナー・ハウスの実現を待望している学生の声として受け取りたい。大学と人間を課題として学生生活を送りたいと念願する学生こそセミナー・ハウスが歓迎してやまない学生である。このような学生を相手として展開されるセミナーこそ、日本の大学教育をよみがえらせる一つの拠点となるに違いない。

セミナー・ハウスはすでに学生の心の中にその根をおろし始めたといつてよい。

私はやむをえずこの公立都留大学に進学して、現在は英文科の二年ですが、大学生活を省みるにつけ、これでよいのだろうかと思わざるをえません。しかし五月末に息抜きの意味で東京教育大学の桐葉祭へ上京し、統一テーマである「大学のそう失とその変革」に関して、私はいろいろと勉強になったと共に、大学の学生協会で貴法人からの「大学と人間」を手に入れて帰りました。その中に語られている各先生方のご意見は更に私共学生に非常に有意義なものばかりでありました。

現在の矛盾の多い中において、私達が次の代を担うものとして正しく生きていくことがいかに大切であるかを痛感しています。そのためにも人間形成の意味で大学外に貴法人のようなすぐれた場が与えられることはどんなに心強いことでしょうか。

早大隈講堂で「人生の選択」についての講演をきいて大いに共鳴しました。私の大学においてもセミナー・ハウスの設立動機にあたるような多くの問題を持つています。大学生として学問のあり方について真剣に考えていきたいと思えます。「大学と人間」という本にセミナー・ハウスの目的が書いてありました。私も現在の停滞した学生生活から進んでいきたいと思えます。

私は機会あるごとに講演会に出席していますが、何回出ても心うたれることばかりです。なるべく多くこのようなチャンスをつくって下さるよう望んでいます。

セミナー・ハウスの目的は、人間関係のうすれている現在の大学においては実にすばらしいことと思えます。マスプロ教育には不満を持っています。現在のような学生が将来の日本を背負っていくのでしょうか。大学生たる誇りをも

って勉強できる場が欲しいと思っています。

「先人に学ぶ」というテーマで、現在活躍なさっている立派な学者が、それぞれ恩師について語っていらっしゃる様子は本当にうらやまし、私達も生涯の恩師とするような先生との出会いがこの大学時代で得られることができたらいと思えます。

現在という時点において、大学はややともすれば本来の理想とする姿を失いがちである。学問をする場としての大学において、教師と学生は単なる教室だけの、講義する、それをきく、だけの関係ではないにせぬと思われる。その意味でセミナー・ハウスが果たす役割は大きく、非常に有意義な計画と

戦後教育の量的増大につれ、かえって質的低下が感じられるようになった。セミナー・ハウスのようなところで真理探究の精神を学びたい。

教育の本質は人格の相互作用にあると思われるのに、教師と学生との人格的つながりがなく、マスプロ教育的であり、この点から見れば現在の大学には教育は存在していないといつてよい。セミナー・ハウスでは学問的人間の刺激を相互に与え合い、知的に、精神的に高め合っていきたいと思う。セミナー・ハウスはそういうところ

ろだと私は理解したい。

本多光太郎の人となりや身近にきくことができた。講演会についている私が今までにない気持ちでいだけたことを喜んでる。できればこのような催しがひんばんに行なわれることを願うものです。

セミナー・ハウスはどこからも圧力のかからないような状態で、真に教授と学生とが学問追究の道を歩み、幅の広い教養の深い人間に学生が成長できるような場所であってほしい。

泥沼の状況を呈しているマスプロ

口教育から脱出したいと思つていた私にとって、セミナー・ハウスは長い間待ち望んでいたことであり、大変喜んでおります。建設された後には大いに利用させていただきますつもりであります。

私のように工学系の単科大学では接する人も限られ、工学系の学生だけです。したがって人間も自然にかたより、世間を知らない人間になりそうです。セミナー・ハウスのような場所で他の学科の学生や教授達に接し交わることができたら、幅の広い人間になることができるでしょう。

入ったところで実現することになった。ご多忙な磯山先生がすばらしい巻頭文をお書き下さったので、創刊号の門出を飾ることができたことは感謝に堪えない。この一文によってセミナー・ハウスは名譽ある使命を負うと共にわが国の大学教育の中に光栄ある地位を与えられたといつてよい。

この機関紙は年四回発行の予定であり、当分は建設にご協力下さった方々や大学関係の方々

編集後記

財団法人を設立してより早くも第四年目の新春を迎えた。毎日が募金のあけくれであるが、講演会や出版活動などを随時行ないセミナー・ハウス設立の目的を広く紹介することにつとめて来たが、大学教育の現状を憂える先生方や大学生活への探究を怠らない学生諸君を多数知って、どんなに激励されたかわからない。このような大学人とともに人間形成の大学教育を推進することは愉快なことである。

これまでも機関紙発行のことがしばしば企画委員会では話題になっていたのであるが、いよいよ建築も進捗し開館の準備期に

そのためである。(S.I.生)